

# 文章における「臨時一語化」と「脱臨時一語化」

## — 脱臨時一語化の形式を中心に —

石井 正彦

### 1. 「臨時一語」とは何か

単語は、その存在のし方というきわめて基本的なところで、大きく二つのタイプに分けられる。一つは、われわれが「単語」というとき普通に思い浮かべるもので、一つの言語社会が共有するレキシコン（辞書）に登録されて恒常的に存在する単語である。いま一つは、われわれが言語生活の中で臨時に、その場限りのものとして産み出し、使っているもので、使い終わればすぐに忘れてしまってもよいような単語である。後者の単語を、林四郎(1982)は「臨時一語」と呼んだ。

林のいう「臨時一語」はその発生事情と内部構造とにおいて多様なものであるが<sup>#1</sup>、本稿では、そのうち、「文章をつくる際に、その場で臨時的につくられる合成語」に注目し、それに限って「臨時一語」<sup>#2</sup>ということにする。たとえば、次のようなものである（いずれも新聞記事のリード、——線部が臨時一語）。

- (1) 中曽根前首相は二十七日午後、都内の中曽根派事務所で中曽根派担当記者と会見し、昨年夏のリクルート疑惑発覚以来初めて、秘書らへのリクルートコスモス未公開株譲渡や米国製スーパーコンピュータ購入問題などについて見解を明らかにした。
- (2) 東南アジア諸国連合各国歴訪を終えた竹下首相は七日朝、帰国に先立って、フィリピンのマニラ市内のホテルで同行記者団と懇談、竹下内閣退陣にともなう後継人事や政治改革<sup>#3</sup>などについて所信を明らかにした。

臨時一語は、本来、複数の単語の結びつき（単語連続）として表されるべきものが臨時に合成語となったものである（例：「中曽根派の事務所」→「中曽根派事務所」、 「（昨年夏に）リクルートについての疑惑が発覚して以来」→「リクルート疑惑発覚以来」）。したがって、臨時一語研究の主たる課題は、そのような臨時一語がなぜ発生するのか、その機構を明らかにするところにある。

臨時一語は形式上は合成語であるから、そのような合成語がなぜ形成されるのかを、語形成論（語構成論）の立場から検討することができる。また、臨時一語は文構成上の単位でもあるから、一文において複数の単語を（付属語の助けを借りず）直接に結びつける単位構成がなぜ可能であるのかを、構文論の観点から論じることでもできる<sup>24</sup>。さらに、臨時一語は、新聞記事に代表される「大量生産的な文章」（林・1982）、許された分量に対してそこに盛り込まれる情報の量が相対的に多い「凝縮的な文章」（石井正彦・1993）に数多く見られることから、その発生を文章論の問題として追究することも可能である。

本稿は、臨時一語発生の一機構として、文章における「臨時一語化」および「脱臨時一語化」と呼ぶべき現象に注目する。当然、文章論的観点からのアプローチということになるが、今は、それらの形式面の特徴を整理する段階にあり、文章の構造や展開などを視野に入れた機能論的な分析は今後の課題である。

## 2. 「臨時一語化」とは何か

臨時一語は、文章を綴る際に書き手がその場でつくりあげる合成語である。「つくりあげる」といっても、それはもともになる単語連続を「圧縮」するだけであり、書き手の独創性が発揮される余地は少ない。いずれにせよ、臨時一語は単語連続をもとにしてつくられる。ただし、この場合、つくられた臨時一語ともとの単語連続とは範列的（選択的）な関係に立つので、臨時一語が文章に現れれば、単語連続は潜在することになる。したがって、臨時一語をつくりあげる過程は、書き手の頭の中にあるだけであって、文章の上に顕現することはない。

しかし、ときには、この過程が文章の上に現れることがある。たとえば、次のようなものである。（〈 〉内は出典の略号と所在ページ，以下同様）。

(3) アレルギーが、初期の免疫学から見ても意外な現象であったことは次のようなエピソードからも知られる。一九〇二年にフランスの医師ボルチェとリシエは、モナコ国王の招きでクラゲの毒の研究をしていた。観光の国モナコで、クラゲの刺傷は重大問題である。ボルチェとリシエは、クラゲ毒に対する免疫を作る目的で、犬に少量ずつのクラゲ毒の注射を行なった。（免疫, 152）

(4) 一九九四年は「イジメ」の問題が、世間の話題をさらいました。そして、年が明けて、九五年になりますと、突如襲った阪神大地震で、イジメという活字がいつせいに新聞紙上から消えてしまいました。もちろん、このイジメ問題が解決され

たわけではなく、学校で、職場で、地域で、このいまわしい現象は依然として行われ、その犠牲者になっている人も少なくないと考えられます。〈哲学,8〉

これらは、いずれも、はじめに単語連続(---線部、以下同様)が現れ、1文おいて、それをもとにしてつくられた臨時一語(——線部、以下同様)が現れている。後続の臨時一語が先行する単語連続をもとにしてつくられたことは、両者の間に観察される、形態上の同一性(同じ語基を要素とする)と文脈上の結束性(意味的な承接関係にある)とから明らかである((4)では、臨時一語に先行の単語連続を指示する「この」が前接していることによって、両者の結束性を確認することができる)。これは、単語連続から臨時一語をつくる過程が、書き手の頭の中だけにとどまらず、一つの文章の上に顕現したものとみてよい。本稿では、このような現象を、文章における「臨時一語化」と呼ぶことにする<sup>5</sup>。

### 3. 「脱臨時一語化」とは何か

臨時一語は単語連続をもとにしてつくられるものであり、臨時一語化はその過程が文章上に現れたものである。一方で、臨時一語は、その臨時性のゆえに、いつでも単語連続に戻すことが可能である。実際、臨時一語に出会った読み手は、頭の中でそのような復元作業を行っているはずである。そして、ときには、そうした復元の過程が文章の上に現れることがある。たとえば、次のようなものである。

(5) 長い戦争時代の終り、敗戦は、日本人全体にとって普遍的な転向体験をもたらした。この体験を思想の中に自覚的にくみあげなかった人は、(サルトルの用語を用いるならば)、ぎまんの人間であろう。じじつ、転向の体験をとおりぬけながら、その体験に関して一言半句ものべずに通りすぎてゆく多くの政治家、実業家、官僚、新聞記者、学者、作家などがいた。〈思想,185〉

(6) しかし、この研究は、日本の教育の内発的な問題に対応して子どもの言語使用の問題に取り組んだというよりも、著者自身が認めているように、イギリスの研究を「念頭におきつつ、日本語において階層と言語の間に同様の関係があるといえるか、あるいは日本語の表現にのみ特有な関係があるといえるのか」を検討する目的の試験的研究であった。実際に、分析の枠組みも、イギリスの研究を若干手直しした応用的なものにとどまった。そして、調査の結果、たしかに日本でも子どもの出身階層によって、言語の使用に若干の違いが発見された。〈大衆,52〉

これらは、いずれも、(3)(4)とは逆に、はじめに臨時一語が現れ、1文において、それを復元した単語連続が現れている例である。臨時一語と単語連続との間に形態上の同一性と文脈上の結束性とがあることは、(3)(4)と同様である。(3)(4)が、先行する単語連続をもとに臨時一語をつくる「臨時一語化」であるとすれば、これらは、先行する臨時一語をもとの単語連続に戻す「脱臨時一語化」とでも呼ぶべき現象である。

#### 4. 脱臨時一語化の形式

文章における臨時一語化と脱臨時一語化とに注目することは、臨時一語の発生を文章の構造や展開と関連づけて説明することにつながるであろう。ただし、現段階では、臨時一語化、脱臨時一語化それぞれの形式上の特徴を整理することが先決であり、機能論的な分析はそれを踏まえた上で行うべきものとする。臨時一語化については石井(1997)に報告したところであるので、本稿では、脱臨時一語化の形式上の特徴を、①臨時一語から単語連続への形態変容、②臨時一語と単語連続との距離、③臨時一語・単語連続の位置、④単語連続の形式、の4点から整理する。用例は、石井(1997)と同様、学術的・専門的なことがらを一般向けに解説した文章から採集した。

##### 4.1 臨時一語から単語連続への形態変容

脱臨時一語化において、後続する単語連続は、先行する臨時一語と同じ語基を使って組み立てられるが、語基の省略、付加、倒置、語種の変更、類義要素への変更などの手段によって、臨時一語とは異なった語基から構成されることも少なくない。

- (7) 特定の私立六年制一貫校には、裕福な家庭の子どもたちが多数入学している。そのような私立校から、有力大学への入学者の数を「制限」しなければ、大都市部の富裕な階層が特権的な階層として固定されかねない。なぜなら、私立の一貫校に入学するには、公立高校よりも高額な授業料を支払えるというだけでなく、小学校のころから有名進学塾に子どもを通わせるための教育費をも負担できる「財力」がものをいうからである。〈大衆,61〉
- (8) 村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』では“高度資本主義”という言葉が使われていたが、まさに私たちの内部の〈アメリカ〉とは、高度資本主義社会の代名詞にほかならない。とすると、私たちにとっての〈アメリカ〉、すなわち高度な資本主義の経済社会の行方を問うことが、八〇年代、九〇年代の次に来る時代の問題に対する答えとならざるをえない。〈文学,185〉

(9) 籠山は、このように児童の家庭的背景による成績の差異が生まれる原因として、児童の欠席状況と、教師・生徒関係とに着目した。第一に、貧しい家庭の児童ほど長期欠席をする場合が多かった。(3文略)

第二に、籠山は学業成績の差を生み出すもうひとつの原因として、生徒と教師との関係に目を向けた。(大衆,35)

(10) 放送衛星(BS)や通信衛星(CS)を利用した衛星放送の新チャンネルの多くは、アメリカの例をみても、専門チャンネルが占める割合が間違いなく多くなるであろう。(3段落略)

現状に対する自己評価・自己批判のないところに新しいチャンネルの免許など考えるべきではないし、そんなことは許されないことだ。(明日,174)

(11) その二つの方法というのは、ソクラテス的方法とアリストテレス的方法です。(2文略)

この二つの方法について、スミスは、当面のイシューに対する聴衆の意見と論者の意見が同じであることが解っている場合には後の方法が、これに対して、聴衆が論者とはちがう意見をもっている場合には、前のソクラテス的なやり方が効果的だといっています。(作品,122)

(7)では、臨時一語中の「六年制」という語基は単語連続に現れないし(省略)、(8)では、逆に、臨時一語にはなかった「経済」という語基が単語連続に現れている(付加)。(9)では、臨時一語における語基の順序(「教師・生徒」と単語連続におけるその順序(「生徒と教師」とが逆になっている(倒置)。(10)では、臨時一語中の漢語語基「新」が単語連続では「新しい」という和語に変わっているし(語種の変更)、(11)では、それに加えて、臨時一語中の「方法」という語基が単語連続では「やり方」という類義の語基に変わっている(類義要素への変更)。

このほか、後述するように、臨時一語が(合成)名詞であって、単語連続が非名詞的な連語や句、節であったり、文や連文であったりすれば、両者の形態上の同一性は一層保ちにくい。このことは、同時に、臨時一語と単語連続とはその意味内容において必ずしも同一ではないこと、あるいは、両者は必ずしも交換可能ではないことを意味してもいる<sup>#6</sup>。

#### 4.2 臨時一語と単語連続との距離

脱臨時一語化において、先行する臨時一語と後続する単語連続とは、さまざまな距

離を隔てて現れる。

(12)~(17)は、臨時一語「A B」が(指示語の前接しない)単語連続「AのB」に脱臨時一語化されるタイプに限って、両者の距離を見たものである。(12)は両者が同一文内にある場合であり、以下、(13)は同一段落内の連続する文に、(14)は異なる段落にわたって連続する文に、(15)は同一段落内で連続しない文に、(16)は連続する段落に、(17)は間に6段落隔てた段落に、それぞれ、臨時一語と単語連続とが位置する場合である。脱臨時一語化は、近くは同一文内から、遠くはかなりの数の段落を隔てた距離でも起こり得るのである。

(12) 野生下では厳しい環境のために、平均寿命は短く老齢個体は早目に淘汰されますが、飼育下では十分な健康管理ができるので、老齢の個体でもかなり長生きができます。〈サル,247〉

(13) 欧米では、女性の社会進出が進むとともに、それに伴ってストレスも増大し、これにうまく対処できないことが摂食障害の誘因の一つになっているといわれている。日本でも男女雇用機会均等法の施行によって、女性の社会への進出はさらに進むであろう。〈失感,45〉

(14) 前項で、自然からの復讐を、現在人間は受けているのではないかと述べましたから、この項ではいじめ問題を一時離れ、自然災害の問題を取り上げていくことにしましょう。

自然の災害といったとき、私のような戦前に教育を受けたものには、忘れられない国語の文章を思い出します。〈哲学,20〉

(15) 現在でもやはりそうであるように、日本人にとって中国語の発音は、なかなか厄介なものである。音韻体系の相違ということもその大きな一因であるが、音節構造のあり方が根本的に違っている。すなわち、一つ一つの漢字で表わされるのが原則として一つの語であり、それらがいずれも一つの音節として発音されるというところに最大の問題がある。たがいに一つの音節どうして意味を識別しようとすると、いきおい、音節の構造が複雑にならざるをえない。〈いろ,115〉

(16) 伊藤は、国会、特に衆議院を大政翼賛システムの機関に仕立て、輔弼の機関たる内閣と、車の両輪の役割をはたさせようとして、異常な努力をかたむけた。しかし衆議院を翼賛システムの中にすっぽりはめこむことは、どうしてもできなかった。衆議院の持つ、下の国民からの代表機能だけは、これを上からの支配機構に完全にかえてしまうことは、ありとあらゆる手段の使用にもかかわらず、成功

をみなかった。

かえて大正期に入るとともに、政党内閣の成立と普選の実行を通じて、逆に衆議院は、翼賛のシステムをはみ出し、国政の中心を占めるにいたる。〈思想,134〉

(17) 法律を犯す性犯罪は、もちろん、エロスの逸脱の極悪形である。しかし、人間が人間として生きる上で、逸脱か否かが大きく問われ、しかも心の微妙な問題を含んでいるのは、法律よりも慣習や常識といった規範の上でのことであろう。ところが、慣習や常識は、それこそ法律のように条文があるわけではない。また時代や地域、さらには年齢や主義・主張によってかなりの幅がある。とりわけ、自由を御旗に掲げたフリー・セックス時代の今日では、そうあることに肯定的か否定的かによっても、逸脱か否かの見解は大きく分かれてしまう。(6段落略)

ところで、フリー・セックスの時代では「逸脱」という言葉はすでに死語になってしまったのであろうか。そうではない、と私は思う。〈逸脱,11-13〉

#### 4.3 臨時一語・単語連続の位置

脱臨時一語化において、先行する臨時一語と後続する単語連続とは、そのいずれか、あるいは、いずれもが、段落の冒頭の文ないし末尾の文にあることが多い。

(18)~(20)は、臨時一語「AB」が(指示語の前接しない)単語連続「AのB」に脱臨時一語化されるタイプに限って、両者の位置を見たものである。(18)は、同一段落の冒頭文に臨時一語が、末尾文に単語連続が現れている例である。(19)では、臨時一語と単語連続とが、ともに、隣接する段落の冒頭文に現れている。(20)では、先行段落の末尾文に臨時一語が、それに後続する段落の冒頭文に単語連続が現れている。

(18) 一九八五年の臨時教育審議会以降、教育改革の方向として出されてきたキーワードには、「教育における個性重視」「教育の自由化」「学歴社会の是正」などがある。「学校教育の画一性」を打破し、「形式的平等主義」を廃する。受験競争のくびきから教育を解き放す。変わるべき方向として、個性や創造性の伸長をめざす教育の改革が提唱されてきた。〈大衆,205-206〉

(19) 日共は、革命必然という観念にとりつかれてしまった結果、革命の理論がテストピリティー・ゾーン(検証可能の領域)をうしない、革命の神話に変質し、しかもこの神話に酔いつづけるという現象がおこった。情勢が変化すれば、この変化の中にただちに革命の爆発力をみつけ、希望のほのおをもやす日共の態度は、情

勢の変化の中に、いつも革命の妖怪をみつけ、恐怖の反応にかられる天皇中心の支配層の態度と、方向は逆であるが、不思議にも共通な心理構造をしめしていた。

革命に一切をかけた日共は、戦争の防止よりも、革命の必然のみを重視する結果をもたらし、戦争に直面して、唯物観念論の本領を実にあざやかに発揮する。

〈思想,172〉

(20) さて、日本のニュース戦争の結果は、また、放送記者やテレビ報道番組のプロデューサーやディレクターに、ジャーナリストとしての自信や自覚を呼び起こすことにもつながった。テレビニュースは、新聞のニュースにくらべて薄っぺらい二流のニュースであり、テレビ・ジャーナリズムは二流のジャーナリズムである、とされる傾向があったが、テレビ・ジャーナリストにとっては、そんな比較はいつでもよくなってきたのである。

テレビのジャーナリズムは、確かに、先発の新聞ジャーナリズムから多くのものを学んできた。〈明日,67〉

(21)は、(19)と逆に、臨時一語と単語連続とがともに段落の末尾文に現れている例である。ただし、単語連続は「A的にBする」という動詞連語であり、また、脱臨時一語化に先立って臨時一語化が起こっている点で、(18)～(20)と同列には扱えないが、参考までにあげておく。

(21) ……多国籍軍側の取材は、戦場取材のプール取材（代表取材）、エスコート取材（情報将校の同行）などによって、徹底的に管理されたものであった。特にテレビ取材については、カメラ位置、カメラアングル、背景にまで、厳しい規制が行われた。多国籍軍、アメリカ軍が取材を許可した映像もまた、情報管理、情報操作されたあとのものであり、自由な取材によるものではなかったのである。このような戦争報道の軍・政府側による徹底管理は、フォークランド紛争の時にイギリスによって、また、グアテマラやパナマ侵攻作戦でアメリカによって、実験済みであることはすでにのべた。（1段落略）

戦争のおもての姿だけが、極端なまでに一方的に伝えられたのだといえる。ベトナム戦争で、軍事作戦のおもての部分と同時に、ベトナムの民衆や兵士、そして、肉体的また精神的に深く傷ついた兵士たちについてのテレビ報道やドキュメンタリーがブラウン管に描き出されたこととは、まさに対照的であった。比較的自由な取材が許されていたベトナム戦争と、取材が徹底的に管理されていた戦争

との違いが、そこにあった。〈明日,36-37〉

このほかにも、臨時一語、単語連続のいずれかだけが、段落の冒頭文ないし末尾文に現れることは多い。臨時一語および単語連続の位置に関するこれらの現象は、脱臨時一語化が、臨時一語化と同様、文章の構造・展開と密接に関係していることを示している。

#### 4.4 単語連続の形式

脱臨時一語化において、臨時一語に後続して現れる単語連続は、連語から文まで、さまざまな形式をとる。

##### 4.4.1 連語

臨時一語が2語基からなる合成名詞（AB）であるとき、それに後続する単語連続は、Aを修飾語、Bを被修飾語とする2語の連なり（連語）となることが多い。中でも、これまでにあげた諸例に見るように、「AのB」という形式の連語が圧倒的に多い。これは、臨時一語化の場合とまったく同様である。名詞連語としての単語連続には、このほかにも、いくつかのタイプが見られる。以下に、資料の範囲内で見出し得た代表例を示す（（ ）内“→”の左側が臨時一語、右側が単語連続）。

##### 〈名詞＋名詞〉

AへのB（教育信仰→教育への信仰〈大衆,27〉／社会進出→社会への進出〈失感,45〉／定時制進学者→定時制への進学者〈大衆,94〉）

AというB（コミュニケーション概念→コミュニケーションという概念〈記号,17〉／「記号」概念→「記号」という概念〈記号,58〉）

AとしてのB（平均寿命→平均値としての寿命〈寿命,83〉）

AとなるB（標的細胞→標的となる癌細胞〈免疫,210〉）

AによるB（本質的把握→本質による把握〈思想,210〉／「学歴差別」→学歴による「差別」〈大衆,129〉）

〈動詞＋名詞〉（離合集散型社会→離合集散する社会〈サル,71〉／成立時期→成立した時期〈いろ,19〉／投入エネルギー→投入されるエネルギー〈寿命,56〉／飼育サル→飼育されているサルたち〈サル,247〉）

〈形容詞＋名詞〉（新チャンネル→新しいチャンネル〈明日,174〉）

〈形容動詞＋名詞〉（日常生活感覚→日常的な生活感覚〈科学,171〉／抽象的読者→抽象的な読者〈作品,101〉／近代的職業→近代的な職業〈大衆,151〉／精神的緊張→精神的な緊張〈逸脱,190〉／国際衛星放送→国際的な衛星放送〈明日,225〉／民族的アイデンティティー→民族的なアイデンティティー〈文学,216〉）

単語連続は、また、動詞連語（被修飾語が動詞である連語）となることもある。その多くは「AをBする」というタイプである。

- (22) 行った研究は、乳糖分解に関与する遺伝子に関するものである。乳糖を分解して、利用できるようにするためには、三つの遺伝子が関与している。〈生命,52〉
- (23) 映画を視聴者の「イマ」の「コンテキスト」に引き入れるのが解説者の役割である。（改行）放送記者が、話題になっている建物をバックにレポートするのもこのことに関係がある。首相官邸や裁判所などの建物は、映像としては「イマ」に必ずしも関係はない。これは解説の補助としての映像ではあるが、解説（レポート）自体の「コンテキスト」作りに役立っており、解説の「イマ」性を強化していると考えられる。いまだに、映像と音とのテレビとしての「コード化」がテレビ・メディアの課題であることを物語っている例である。このように、解説が「イマ」の「コンテキスト」を作る役割を負わされている。〈記号,146〉

動詞連語である単語連続には、このほかにも、AでBする（母音終り→母音で終る〈いる,72〉）、AにBする（治安維持法反対→治安維持法に反対する〈思想,168〉／東大入学→東大に入学する〈大衆,66〉）などのタイプが、資料の範囲内では見られた。

なお、(24)は、先行する臨時一語が合成名詞ではなく、合成動詞である例である。

- (24) 現在の夏の高校野球は、一九一五年に「全国中等学校優勝野球大会」としてスタートした。この中等野球がラジオ中継されるようになったのは、一九二七年八月一三日の開会式からで、大阪中央放送局が行なったものである。（2段落略）
- すでにかかなりの評判を得ていた中等野球は、ラジオで中継されることによって、人びとの話題となり、ますます人気を高めていく。〈記号,160〉

#### 4.4.2 句

臨時一語は、脱臨時一語化されて、3語以上の連なりとしての連語や「句」になることもある。臨時一語化の場合には、先行する単語連続が句であるとき、その自立的な単語のすべてが臨時一語の語基になることは少ないのだが、脱臨時一語化の場合には、それと逆の方向性で、先行する臨時一語にない語基を補って単語連続がつけられることが多い。

(25) このように考えると、メリトクラシーの大衆化状況を生み出すうえで、先に見た教育の大衆的な規模での拡大が重要な条件であったといえるのではないか。教育を重要だと見なし、教育を求める意識が、社会のすみずみにまで浸透する——大衆レベルでの教育への参加があってはじめて、メリトクラシーが大衆的に拡大していったと考えられるのである。

しかも、メリトクラシーの大衆化した状況は、メリトクラシーが大衆にまで広がったという量的な側面だけを意味しない。〈大衆,19〉

(26) 「テレビは一つの情報媒体である」というとき、伝える内容を情報とみて、テレビはそのような情報をもたらす媒体（メディア）であるという考え方にもとづいている。〈記号,21〉

(27) たとえば、自己犠牲による神や隣人に示す宗教的愛（アガペー）は、対象愛の完成された形とされている。しかし、他者のために自己のすべてを犠牲にしても、そうすることに自己存在の意義を見出すとすれば、それもまた自己愛である。〈逸脱,59〉

(25)は、臨時一語（これは「メリトクラシーの」をも含む連語形式の臨時一語である）と同じ語基を使って単語連続を組み立てた例であるが、(26)では「もたらす」、(27)では「すべて」といった、臨時一語にはない語基が補われている。

#### 4.4.3 節

臨時一語は、脱臨時一語化されて、そこに主述の関係を含む「節」になることもある。ここでも、句の場合と同様、臨時一語にはない語基が補われることが多い。

(28) だが一九九〇年代に入り、株価暴落、不動産価格下落、設備投資や個人消費の低迷、証券・銀行不祥事の続発、企業のリストラ、営業店閉鎖、給与カット、人

員削減、自宅待機、新規採用内定取消等々、暗いニュースが次々にでてくる中で「巨大銀行倒産」の悪夢がいやでもちらつくようになってきた。(2段落略)

(2文略)そして、不動産価格の下落に伴う貸出先倒産とか、住宅専門金融機関の兆円単位の不良債権問題などの影響を受けて、明日にでも銀行が倒産するのではないかという噂までが流れたりしている。(銀行,11-12)

- (29)しかし、さすがの佐藤政権もこのころは落日を迎えていた。まず、日米繊維問題があった。日本の繊維輸出に押しまくられていた米国が輸出規制を望んだ問題で、六九年の沖縄返還交渉に当たり、佐藤は「核抜き」の保証とひきかえに規制に応じた形跡がある。(政治,121)

(28)は、臨時一語にはあった「巨大」という語基が引用節では省略された例であるが、(29)では、臨時一語中の「日米」という語基が、脱臨時一語化された連体修飾節中で「日本」および「米国」となっているほか、さまざまな語基が補われている。

#### 4.4.4 文

臨時一語は、脱臨時一語化されて、文となることもある。

- (30)近年の急速な開発の波は熱帯林に代表されるサルの生息環境を急激な勢いで破壊しており、地域を問わず深刻化しています。このため、調査地を維持するにはサルとそれを取りまく生態系全体を保護するための活動も重要です。生息頭数の変化を調べ、生存を保障する環境の質と量を推定し、保護区づくりのための研究・調査をする背景はこうしたところにあります。さらに言えば、研究だけでは保護区はすぐにできません。政府に働きかけること、住民の理解を得ること、そして莫大な建設資金が必要です。(サル,251-252)

- (31)こうしたクルマの中の“密戯”が『夕暮まで』には繰り返し描かれているのだが、街の中を高速度で移動してゆく“密室空間”としてのクルマと、(杉子)の口にする「家」とはここでは二律背反的なものとしてとらえられていることに気がつかざるをえない。(4文略)〈佐々〉の運転するクルマの中の“密室”は、本質的には人目を忍ぶ連れこみ宿の四畳半的な空間と同じものなのであり、それは世間の良俗と背馳し、「家」や「家庭」の平穏な生活とは鋭く敵対するような場所にほかならないのである。(文学,143-144)

- (32)「水戸黄門」には助さん・格さんだけでなく、風車の弥七や八兵衛などが、

たえず集団を形成している。「遠山の金さん」にも取巻きがいるし、「暴れん坊  
將軍」も居候先の〈め組〉一家、〈じい〉、大岡越前、警護のお庭番などが主人  
公(レギュラー)集団である。「必殺シリーズ」は、いうまでもなく仕事人の集  
団がドラマを展開させる。いずれも、レギュラーの登場人物が集団を形作ってい  
る。〈記号,10〉

(33) 分裂を重ねる度に、次はどのような役割を持つ細胞を産み出すかということを知ってそれに見合った変化をしたゲノムを作り出しているのである。では、次に何を作るべきかはどのようにして知るのか。今のところは「位置情報」というあいまいな言い方しかできない。分裂してでき上っていくたくさんの細胞仲間の中でどの位置に置かれるか、それが重要な情報になっているのである。〈生命,95〉

(30)は、臨時一語を構成する語基が、脱臨時一語化によって、有題文の主題と述語とになった例である(臨時一語の「づくり」と単語連続の「でき(ません)」とを類義と考える)。(31)も、意味的には主題と述語(「密室は空間」といってさしつかえない例であろう)。(32)は、臨時一語を構成する語基が文の(主語・述語などではなく)修飾語や補語になっている例である。(33)は、臨時一語の前部語基(「位置」)が従属節に現れ、後部語基(「情報」)が主節に現れている例である。

## 5. まとめ

以上、脱臨時一語化の形式を4つの観点から整理した。結果として、脱臨時一語化は、臨時一語化と同様の特徴をもつといえる。脱臨時一語化にあたって、語基の省略、付加、倒置、語種の変更、類義要素への変更などが生ずること、脱臨時一語化が、近くは同一文内から、遠くはかなりの数の段落を隔てた距離でも起こり得ること、臨時一語と単語連続とのいずれか、あるいは、いずれもが、段落の冒頭文ないし末尾文に現れやすいこと、脱臨時一語化されて生ずる単語連続が連語から文までさまざまな形式をとることなど、その特徴は、臨時一語化について観察したこととほとんど一致する(単語連続の形式におけるバラエティーが臨時一語化に比べて少ないこと、連文の形式をとる単語連続が見出せなかったことなど、若干の違いがあるが、資料上の制約、あるいは、用例採集の精度の問題などもあり、明確な相違とは言えない)。

ところで、「脱臨時一語化」という名付けは、これが「臨時一語化」を前提としていることを含意しているわけだが、このことは、脱臨時一語化が具体的な文章の上でも臨時一語化を前提とする、ということの意味するわけではない。

(34) こうした条件以外に、現代の若者のあいだで、骨そのものをもろくさせる事態が進んでいる。骨をつくるカルシウムの摂取量が減っているのだ。

カルシウムの摂取基準量は一日当たり〇・六グラムであるが、最低でも、〇・四グラムを下回ってはならない。ところが、栄養学についての専門教育を受け、その仕事をしている若い男女のカルシウム摂取量を調べたところ、〇・二グラムに達していなかった人が七割もいた。

なぜ、これほどカルシウムの摂取量が少ないかといえば、まず第一に、……  
〈寿命,92〉

(34)では、はじめに臨時一語化（「カルシウムの摂取量」→「カルシウム摂取量」）が起こり、それに続いて脱臨時一語化（「カルシウム摂取量」→「カルシウムの摂取量」）が起こっている。この脱臨時一語化は、まさに、臨時一語を単語連続に「復元」しているのだが、このような例はむしろ少数派であり、臨時一語がいきなり現れる、すなわち、臨時一語化を前提としない例の方が多いのである。脱臨時一語化は、臨時一語化の単なる裏返しや反作用ではない。なお、以上の記述では、(21)を除いて、臨時一語化を前提としない脱臨時一語化のみを扱った。臨時一語化に後続して起こる脱臨時一語化については、それらを一体のものとして別に検討することにしたい。

### 用例の出典

- 〈思想〉久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』（岩波新書, 1956.11）
- 〈いろ〉小松英雄『いろはうた』（中公新書, 1979.11）
- 〈作品〉内田義彦『作品としての社会科学』（岩波書店, 1981.2）
- 〈記号〉北村日出夫『テレビ・メディアの記号学』（有信堂高文社, 1985.6）
- 〈科学〉浅田彰他『科学的方法とは何か』（中公新書, 1986.9）
- 〈学ぶ〉稲垣佳世子・波多野植余夫『人はいかに学ぶか』（中公新書, 1989.1）
- 〈寿命〉西丸賢也『41歳寿命説』（情報センター出版局, 1990.8）
- 〈逸脱〉森省二『逸脱するエロス』（講談社現代新書, 1990.8）
- 〈サル〉京都大学霊長類研究所編『サル学なんでも小事典』（講談社, 1992.5）
- 〈免疫〉多田富雄『免疫の意味論』（青土社, 1993.4）
- 〈明日〉岡村黎明『テレビの明日』（岩波新書, 1993.5）
- 〈銀行〉津田和夫『巨大銀行の構造』（講談社現代新書, 1993.7）
- 〈生命〉中村桂子『自己創出する生命』（哲学書房, 1993.8）
- 〈失感〉熊井三治・藤井真一『失感情症の時代を生きる』（朝日新聞社, 1993.12）
- 〈政治〉石川真澄『戦後政治史』（岩波新書, 1995.1）
- 〈文学〉川村湊『戦後文学を問う』（岩波新書, 1995.1）

〈哲学〉御厨良一『哲学が好きになる本'95年版』(エール出版,1995.3)

〈大衆〉荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』(中公新書,1995.6)

## 注

- 1 林(1982)は「臨時一語」を、その発生事情から、大きく「A. 生活場面の中で発生する臨時一語」「B. 文章の中の特別な位置による臨時一語」「C. 『文』の中に生ずる臨時一語」に分類し、また、Cの臨時一語については、その内部構造から、「a. 固い名詞の臨時一語」と「b. ルーズな名詞の臨時一語」とに分類している。
- 2 ここでいう「臨時一語」と同様の概念として、H.Eggers(1973)の“Augenblickskompositum”(即席合成語)、鈴木康之(1982)の「自由な複合語」、窪園晴夫(1987)の「非複合化複合語」、影山太郎・柴谷方良(1989)の「統語論的複合語」、影山太郎(1993)の「S構造複合語」などがあるが、(日本語の)文章とのかかわりを論ずるためには、「臨時一語」がもっとも適当であると考えられる。
- 3 「政治改革」が臨時一語であることについては、異論があるだろう。それは、臨時一語と恒常的な単語との境界線がはっきりしないからである。加えて、臨時一語の中には恒常的な単語へと移行=定着するものがある。「政治改革」という単語も、おそらく、臨時一語として発生し、新聞やテレビなどで繰り返し使用されることによって、安定した恒常的な単語へと移行しつつあるのだろう。その移行過程のどの段階にあるかの判断が、人によって分かれるのである。本稿で資料としたような準専門的な文章にも、そのような、「専門用語予備軍」とでもいうべき臨時一語が多い。
- 4 石井(1998)は、臨時一語発生の要因を述語論の観点から考察したものである。
- 5 石井(1997)では、単語連続と臨時一語とは本来paradigmaticな関係にあるものとし、両者が文章上に顕現した場合を「syntagmaticな臨時一語化」と呼んだ。ただし、「syntagmatic」の意味合いがわかりにくく、また、「脱臨時一語化」との関係も明示できないので、本稿では(文章における)「臨時一語化」と呼ぶことにした。
- 6 次例のような場合には、後続する単語連続のうち、その前要素(「文法を」)のみがその前の修飾語句を受けているので、臨時一語との交換は不可能である。このような場合、構文が脱臨時一語化を強制的にひきおこしたと考えるか、脱臨時一語化がこのような構文を可能にしたと考えるか、簡単には言えない。  
およそ人間の学習のなかで、文法獲得ほどのすばらしい成功例は、稀だといってよい。母語に関しては、ほとんど例外なしに、われわれは複雑な形式的規則の体系としての文法を獲得しているからだ。(学ぶ,69)

## 文献

- 石井正彦(1993) 臨時一語と文章の凝縮、『国語学』173  
——(1997) Syntagmaticな臨時一語化—文章における先行表現の臨時一語化について—, 加藤正信編『日本語の歴史地理構造』, 明治書院  
——(1998) 臨時一語発生の一要因—「~の」連続の回避—, 計量国語学会第42回大会研究発表
- 影山太郎(1993) 文法と語形成, ひつじ書房
- 影山太郎・柴谷方良(1989) モジュール文法の語形成論—「の」名詞句からの複合語形成—, 久野暉・柴谷方良編『日本語学の新展開』, くろしお出版
- 窪園晴夫(1987) 日本語複合語の意味構造と韻律構造, 『アカデミア』文学・語学編(43)
- 鈴木康之(1982) 述語の構造に対する複合語の役わり, 『大東文化大学紀要』20<人文科学>
- 林 四郎(1982) 臨時一語の構造, 『国語学』131(林四郎『漢字・語彙・文章の研究へ』, 明治書院, 1987に再録)
- Eggers, Hans (1973) *Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert*. Munchen: R. Piper & Co. Verlag. (岩崎英二郎訳『二十世紀のドイツ語』, 白水社, 1975)

(いしい・まさひこ 国立国語研究所員)